

経営状況分析の8指標

【分析指標の算式および意味】

分析指標	算式	上限値	下限値	注意事項	指標の意味
○負債抵抗力					
純支払利息比率(X1)	$\frac{\text{支払利息}-\text{受取利息配当金}}{\text{売上高}} \times 100$	5.1%	-0.3%	※各勘定科目の金額は全て千円単位 ① 売上高には、完成工事高及び兼業事業売上高を含む。(以下同様) ② 売上高=0の場合は上限値とみなす。	建設企業の有利子負債の状況を支払利息の観点からみた比率で、小さいほど良い。
負債回転期間(X2)	$\frac{\text{負債合計}}{\text{売上高} \div 12}$	18.0	0.9		
○収益性・効率性					
総資本売上総利益率(X3)	$\frac{\text{売上総利益}}{\text{負債純資産合計(2期平均)}} \times 100$	63.6%	6.5%	① 負債純資産合計(2期平均)が3,000万円に満たない場合は、3,000万円とみなす。 ② 個人の場合、経常利益は事業主利益と読み替える。(以下同様) ③ 売上高=0の場合は下限値とみなす。	総資本(負債純資産合計)に対する売上総利益の割合で、投資効率を企業のもっとも基本的な利益である売上総利益からみた指標。高いほど良い。 売上高に対する企業の経常的な活動からの利益(経常利益)の比率。財務活動なども含めた通常の企業活動における利益率であり、高いほどよい。
売上高経常利益率(X4)	$\frac{\text{経常利益}}{\text{売上高}} \times 100$	5.1%	-8.5%		
○財務健全性					
自己資本対固定資産比率(X5)	$\frac{\text{純資産合計}^{※1}}{\text{固定資産合計}} \times 100$	350.0%	-76.5%	① 純資産合計 \leq 0かつ固定資産=0の場合は下限値とみなす。純資産合計 $>$ 0かつ固定資産=0の場合は上限値とみなす。 ② 負債純資産合計=0の場合は下限値とみなす。	固定資産比率の逆数をとった比率で、設備投資など固定資産がどの程度自己資本(純資産)で調達されているかをみる。逆数をとっているのが高いほど良い。 総資本(負債純資産合計)に対し、自己資本(純資産)の占める割合をみるもので、資本蓄積の度合いを示す比率。高いほど良い。
自己資本比率(X6)	$\frac{\text{純資産合計}^{※1}}{\text{負債純資産合計}} \times 100$	68.5%	-68.6%		
○絶対的力量					
営業キャッシュフロー(X7)	$\frac{\text{(経常利益+減価償却実施額+貸倒引当金増加額-法人税・住民税及び事業税-売掛債権増加額+仕入債務増加額-棚卸資産増加額+未成工事受入金増加額)}}{100,000} \quad (2期平均)$ <small>※2</small>	15.0	-10.0	① 売掛債権=受取手形+完成工事未収入金。 仕入債務=支払手形+工事未払金。 棚卸資産=未成工事支出金+材料貯蔵品。 ② 貸倒引当金(長期を含む)は、正の数値で計算する。 ③ 個人の場合、利益剰余金は純資産合計を用いる。	営業活動で得られた資金が、どれだけ増加したかをみる指標で、高いほど良い。 会社設立以来の損益の蓄積の度合いをみる指標で、高いほど良い。
利益剰余金(X8)	$\frac{\text{利益剰余金}}{100,000}$	100.0	-3.0		

※1 連結決算の場合は、(純資産合計-少数株主持分)の額とする。

※2 連結決算の場合は、連結営業キャッシュ・フロー計算書における営業活動によるキャッシュ・フローの額とする。

【経営状況点数(A)の計算】

$$A = -0.4650 \times (X1) - 0.0508 \times (X2) + 0.0264 \times (X3) + 0.0277 \times (X4) + 0.0011 \times (X5) + 0.0089 \times (X6) + 0.0818 \times (X7) + 0.0172 \times (X8) + 0.1906$$

X1~X8 : 小数点以下第3位未満四捨五入

A : 小数点以下第2位未満四捨五入

【経営状況評点(Y)の計算】

$$Y = 167.3 \times A(\text{経営状況点数}) + 583$$

Y : 小数点未満四捨五入

(最高点 1,595点 ~ 最低点 0点)